

恵林寺便り

平成 27 年
第 43 号

2 月 1 日

不 是 一 番 寒 徹 骨

こ いちばん かんほね てっ
是れ一番 寒骨に徹せずんば

争 得 梅 花 撲 鼻 香

いかで え ばいか はな う かんば
争か得ん 梅花の鼻を撲って香しきことと

(『槐安国語』)



はや、二月となりました。

二月の四日は立春りっしゅんです。立春は、東風凍とうふうこおりを解く...といわれるように、東からの春風が吹き始め、厳寒の冬のうちに凍てついた厚い氷を溶かし始める季節です。さて、今回の禅語です。

是れ一番 寒 骨に徹せずんば

争か得ん 梅花の 鼻を撲って香しきことを

「是れ一番」...さあ、いざここ、というまさにその時、「寒 骨に徹せずんば」... 辛く厳しい寒さが身体の芯までしみ通り、骨まで凍り付いてしまったかのように、冷え切ってしまう...

長い冬の中では、どれほど凌しのいで凌しのぎきれないような寒さがわたしたちを襲うことがあります。もちろん、それは寒さには限りません。長い冬というのは、人生における苦難の日々と受け止めてもよいですし、寒さというのは、辛さや苦しみと読みかえてもよい。

日常生活の中で孤軍奮闘こぐんふんとう、身も心もくたくたに疲れ切ってしまう... 精神的・肉体的な苦痛さいなに苛うまれ、気力も失せてしまう... 怒り、悲しみ、不安、恐怖に追い回され、自分自身を見失って途方に暮れてしまう...

そうした辛さ、苦しみが骨に徹する... 寒さで骨まで凍りついてしまったような、そんな厳しさのただ中にある... 本当の痛みや苦しみ、悩みや悲しみは、骨に突き刺さるように感じられるものです。しかしこの禅語は、だからこそ、骨に徹するほどの辛さを経験しな

くてはいけない、というのです。「争か得ん...」^{いかで え}というのは、そんな辛さを知らないでいて、どうして本物の梅の香の何たるかを知ることなどできようか... そんなことでは、とても無理だ、というのです。誰もが苦痛を厭い、^{いと}避けたいと願う... それは当然のことです。しかし同時に、骨の髄まできりきりと苦しい本当の辛さ、本物の辛酸を舐めることがなければ、春の訪れを告げる梅の花の香りの、本当の素晴らしさを味わうことはできない...

修行の必要性は、まさにここにあるのです。

恵まれた環境のなか、望ましいコンディションで事に臨むのではないのです。^{こと のぞ}是れ一番... さあ、いざここ、というまさにその時、人生の正念場においてこそ、その人が試される...

人生のどん底でもがいている人に手をさしのべることは、とても難しい... 誰もが自分の人生を生きるので精一杯です。だから、誰もが一番大事なときには、どれほど厳しい中におかれようとも、自分の力でそれを乗り切っていかななくてはなりません。

辛さが骨に徹するとき、なりふりなど構ってはられません。必死の形相になって立ち続け、夢中で歩き続けるしかないときがある。

その時、ふっと梅の香りが鼻を撲つ...

梅の香が私たちの鼻を撲ち、ハッとわれに返る... これは、素晴らしい気付きの瞬間です。辛いことを我慢して待っていれば、いつか良いことがやっている... などという根拠のない、無責任な期待をいうのでもないのです。うまくいくかどうかはわからない... 何事であれ、人生のことには保証はありません。始まる前には、何もわからないのです。

ただ、それでも、ただ待ち、ただ歩き続ける... これこそが人生の道、修業の道の唯一の作法なのです。

